

東地中海の経済覇権を 800 年維持したヴェネツィアから今の日本を考える

平成 30 年 10 月 2 日 大柴隆士

日本に良く似た面白い国であり、今の日本に参考にもなるヴェネツィアの本を読みましたので報告します。

ヴェネツィアはイタリア北部アドリア海の奥にあり、452 年に建国されラグーン（潟）中央に人工島を作って住みました。独立国として 1,300 年に亘ってその主権を維持した長寿国でした。現在、ヴェネト州の州都で人口 9 万人弱。世界遺産に登録され歴史的な交易、政治、軍事の跡が残っておりビザンチン、ゴシック、ルネサンス、バロック様式の建物や絵画などに囲まれて、世界的な観光地になっています。 先ずは日本から始めます。

1. 「日本」

1. 1 ホモサピエンスの到着

(1) 安住の地へ

霊長類の原猿類は、6,500 万年前マダガスカル・インド亜大陸で生まれた。亜大陸は大陸移動してユーラシア大陸に合体し、原猿類は真猿類（広鼻猿類、狭鼻猿類）に進化した。2,000 万年前には狭鼻猿類の中から類人猿（テナガザル、オランウータン、ゴリラ、チンパンジー、ボノボ）が生まれた。

400 万年前に類人猿からヒト（アウストラロピテクス、ホモハビリス、ホモエレクトウス、ホモサピエンス）が現れた。20 万年前に分岐したホモサピエンスは、従来の類人猿と違って身体表面の大部分に毛が無い。これは水辺生活して魚や貝を取ったためと言われる。水中に住む哺乳類は、クジラ、イルカ、カバなど毛が無い。ホモエレクトウスより体格で劣ったホモサピエンスは、サバンナより沼地に住み、水に潜って食料を得た。

ホモサピエンスの出アフリカは 2 回。12 万年前にシリアを経て欧州に向かいネアンデルタール人に遮られた。7～8 万年前、紅海の南端を渡り、北と東に向かって拡散した。北に向かった群は欧州のネアンデルタール人と混ざりあい定住した。東に向かった群は海沿いにアラビア半島、インド、東南アジアを経てホモエレクトウスに追われ、追われて、日本に 3 万年前に辿り着いた。大陸との陸続きが止んだ後は海を渡って来た。着いてみると海に囲まれた豊かな自然のもと魚も貝も豊富で、来る者は拒まず、寛容な気質が出来た。（* 1）

* 1～「ヒト」（島泰三）

(2) 米と鉄

15,000 年ほど前から始まる縄文時代のほとんどの期間は、氷河期が終わる温暖期に相当し縄文海進が起きる。この時以来、日本は大陸から離れる。大陸からの適度な距離が、漂流者を受入れ、外来者をもてなし、侵略者を撃退することに役立った。人々は狩猟、漁猟、採集生活を送り、民族としての骨格を作った。

BC10 世紀ころ水稻文化が北部九州に伝わると、米と鉄に象徴される弥生文化は、東方の人々に急速に受け入れられ、BC3 世紀には、関東、東北まで伝わった。（* 1）

米は、発芽～成長の時期に水に浸かり、成熟期には水が引いておく必要があり、日本のモンスーン気候は米作に適していた。また、米作は土工土木を伴う。低地では沼地から排水路を引いて悪水を除き、高地にはため池を作って給水路を設けるため、鉄を用いた農耕工具を必要とした。鉄は木を炭にして強火を起し砂鉄を溶かして作る。鉄は大量の木材を消費する。鉄 1 トンを得るには、砂鉄 12 トン、木炭 14 トンが必要であり、この為には、山林 10 町歩を潰して薪 100 トンを消化すると言われている。鉄を得るためには一山がはげ山になる。雨が多い日本では森林の回復が早く 30 年で元の姿になるという。（* 2）

こうして日本では、多種の工具を作る余裕があり、日本人の好奇心を育んだ。優しい自然の中に住む日本人は、自然を敬い、好奇心を高め乍ら暮らしていた。

* 1～「縄文の思想」（瀬川拓郎）

* 2～「街道をゆく # 7 巻（砂鉄の道）」（司馬遼太郎）

1. 2 新しい文明の取り込み

日本は島国だが、海外からの脅威を度々受け、その度に文明を取り入れ、必要な部分だけ消化した。

(1) 律令制

663年 白村江の戦いで百済支援に向かった日本は、唐・新羅連合軍に大敗した。唐の侵攻から国を守るため、「律令制度」（「班田収授法」「公地公民制」）を導入した。儒教に依って立つ唐王朝から律令制を導入して日本の官僚制度を整備しながらも、科挙制度は決して受け入れなかった。更にこの律令制も743「墾田永年私財法」が制定されると、新たな開墾地は私有可能となり、律令制は骨抜きにされた。

(2) 儒教と仏教

5～6世紀に両者がほぼ同時期に日本に伝わった時、当時の大和朝廷は儒教の受入れは淡々と、仏教の受入れは全力を挙げた。これは、隋・唐の中華圏に取り込まれないように、取り計らったためである。中華圏の儒教より、より国際的な仏教を取り入れることにより日本と隋・唐が対等であることを示した。（*1）

607年 聖徳太子の遣隋使 小野妹子が持参した文書には「日出づる処の天子、書を日没するところの天子に致す。つつがなきや」とあった。天子は天命を受けて「唯一の統治者」と考えている隋の煬帝は怒ったと。

しかしこの仏教も奈良六宗による、宗教論争のみの姿勢に業を煮やした桓武天皇の平安京遷都以降、天台宗・真言宗以降の日本仏教に置き換わった。

<平安仏教>

空海は「三教指帰」を著し、儒教と道教と仏教の論争を描いた。儒教は「個人と一族の立身出世と栄華富貴を求める」。道教は「己の不良長寿と現生利益を求める」と何れも個人の問題を扱うが、仏教は「万民の救済を求めている。」、仏教の「一切衆生」の考えこそ価値が高いと述べた。

最澄は、奈良六宗の徳一と論争した。徳一は「生まれつき成仏出来る人間と成仏出来ない人間が居る」と言い、最澄は「誰でも仏性が備わっていて努力すれば誰でも成仏できる」と言い、同じく「一切衆生」を説いた。

<鎌倉仏教>

法然や親鸞は、阿弥陀様に感謝して「南無阿弥陀仏」と唱えるだけで成仏できると言った。誰でも成仏できるとは「山川草木悉皆成仏」「草木国土悉皆成仏」することであり、「自然万物のなかに靈性が宿っている」という日本人本来の世界観に合致していた。

*1～「なぜ日本だけが中国の呪縛から逃れられたのか」（石平）

(3) キリスト教

1549年 フランシスコ・ザビエルが、薩摩に上陸してキリスト教が伝わった。またたく間に、30万人ほどの信者を得たが、1589年 秀吉の禁教令、1633年 家光の鎖国令が発布され異教となった。ザビエルの布教時に「神は全てを見通しておられる」と言うと、薩摩の某庶民が「全てを見通しておられるなら、何故、今まで日本だけが見残されていたのか？」と問い返され、言葉に詰まったという。「神がいる」というドグマを見破る庶民の慧眼もさることながら、キリスト教を前面に押し出し、貿易を始めて、後ろに植民地化の軍隊が続くプロセスを見破った秀吉、徳川家の慧眼も流石だった。

1. 3 江戸時代が日本を作った

(1) 交易

江戸時代には世界にまれな商業資本主義を作り上げた。秀吉の代、日本各地から物資が大阪に集まり、大阪で市が立ち、大阪から日本各地に物資が行きわたる仕掛けを作った。江戸幕府は大阪を天領にして、この仕掛けを踏襲した。大阪から瀬戸内、日本海を経て東北、北海道まで行きかう北前船は、蝦夷地で獲れた魚肥（金肥）を大阪に運び、大阪の畑に魚肥を蒔いて獲れた木綿を各地に卸した。北前船では赤穂塩、伊予かすり、鬢つけ油、紅花（最上川・京都）なども運ばれた。特に、江戸は武家屋敷が立ち並び消費だけの都市であり、大阪から船で運ぶ下り物（古着、酒、菜種油）は江戸に必須だった。（*1）

こうして、遠隔地交易により「価格の差（差異性）が利潤を生みだす」と言う資本主義が生まれた。「差異性が利潤を生む。」という原則は明治以後、工業中心の産業資本主義でも、情報中心のポスト産業資本主義でも変わらず、日本の成長を支えている。

*1～「菜の花の沖」（司馬遼太郎）

(2) 商人

江戸時代の識字率は7割あり、寺子屋で使われる教科書「往来物」は数千種類あったという。中国・朝鮮では文字を書く人は、科擧の試験に通ろうとする人だけだった。ヨーロッパでも神父だけがラテン語を学んだ。高い識字率は商品経済が生んだ。字を覚えて帳簿を付けることは、日本では番頭さんになる、船長さんになるために必須の機能だった。ヨーロッパでも16、17世紀になると商人になる人も文字を学んだ。

商人はものの質と量を正確に把握する、お互いに交わした約束は必ず守る。ここから「義務」の概念が生れ、「個人」が確立されて、商品経済が始まる。江戸時代に沸き立つような資本主義があったればこそ、植民地化の波を押し返し、明治時代の日清・日露の戦を乗り越えることが出来た。

1. 4 日本人の姿勢

海に囲まれ、豊かな自然に恵まれて、そこそこに霊が宿る日本の国は、「山川草木悉皆成仏」の神の国である。海外から新しい文明が現れれば、躊躇なくその文明に飛び付き、好奇心旺盛に取り組みながら、摂取したいものだけを選択して摂取した。しかも、新しい文明の中にある、独善的なドグマを切捨て、ついで飼い馴らしの文明（儒教、キリスト教、イスラム教）を入れなかった。（*1）

こうして、日本は活発旺盛な産業活動とともに、豊かな自然、旺盛な好奇心、ドグマからの自由、資本主義（識字率、質と量の把握、契約の重視）を守り、一民族が一国家を維持するという独特な文明を育てた。

*1～「講演集1、3、5」（司馬遼太郎）

2. 日本に良く似た海洋国家ヴェネツィア

一方、欧州でも追われ追われて、安住の地を見出し、周辺の大国に囲まれ多難な環境に耐えて、交易・外交・軍事に基づき国家を維持した人々が居た。欧州の国々は、ローマ帝国の1,300年(BC753~AD476)より遥かに短命だったが、ヴェネツィアだけはローマ帝国と同じく1,300年(452~1797)の長寿を保った。

長寿を保った理由はリストラしなかったためである。ギリシャにしてもフィレンツェにしても苦境に陥った時、政敵を殺害・追放した。ローマもヴェネツィアも人材を保存し、状況が変われば活用した。(※1)

ヴェネツィアの立国の根幹は「交易」である。欧州人は「初めに言葉ありき」というが、ヴェネツィア人は「初めに商売ありき」に徹して生きた。

ヴェネツィアが発行した通貨は「デュカート金貨」で、信用が高く欧州で広く流通した。「貨幣を媒介とした取引こそが、資本主義の原則である。」「資本主義~それは、資本の無限の増殖をその目的とし、利潤のたえざる獲得を迫及していく経済機構の別名である。利潤は差異から生まれる。利潤とは二つの価値体系の間にある差異を資本が媒介することによって生み出されるものである。」(※2)という言葉そのものを実現した。

※1~「逆襲される文明」(塩野七生)

※2~「ヴェニス商人の資本論」(岩井克人)

2. 1 建国までの北イタリア (~452)

(1) ローマの平和

BC753年 ローマ建国の頃、ヨーロッパはガリア人(ケルト人)が優勢だった。イタリアにはエトルリア人やガリア人やギリシャ人が住んでおり、長い間、ローマは弱小な時代を過ごした。BC390年にはガリア人がローマ近辺を制圧し、ローマ人は半年もカピトリノの丘に立て籠もらざるを得ない時代もあった。しかし、BC146年ポエニ戦争が終わるころ、アルプスの南側のガリアの住み家(チザレピーア)もローマ属州になる。カエサルはラヴェンナに州都を置いて、ガリア戦争に臨む。BC49年のルビコン川渡河の作戦発起点もラヴェンナだった。

117年 ローマ帝国は五賢帝トラヤヌス時代に最大版図を得る。北イタリアは国境線(ウィーン、ブダペスト)から300~400Kmの距離にあり平和な時代を過ごした。

(2) ローマの衰退

最大版図の維持は、長期に亘れば困難を生む。国の根幹だった中小土地所有者(重装歩兵軍団兵士)が没落し、大土地所有者は自給自足して地方に独立。ゲルマン人の平和的移住や傭兵化が進んだ。軍隊に傭兵制が採用され、経済的には軍事費増大による重税でインフレを招き、都市の崩壊、商業の衰退を招いた。ローマの弱体化に伴い、ゲルマン民族が次第に侵入し、ローマ帝国の政治、経済、軍事機能は低下した。(※1)

313年には、キリスト教が公認される。キリスト教が生まれて300年も経たこの時期になって公認されるのは、「ローマ人が、自信を無くして強力な存在に縋りたい。信ずることで救われたい」と思ったからという。(※2)

更に375年 フン族の西漸が始まる。フン族は中央アジアに住んでいた遊牧民族で、匈奴の一派と言われる。東ゴート族を追い出し西ゴート族を圧迫したため、ゲルマン民族の移動が始まった。ローマ帝国内部にも混乱が発生し、378年 アドリアノーブルの戦いではローマはゴート族に敗北し、皇帝ヴァレンスが戦死するに到る。

(※3)

※1~「文明が衰亡するとき」(高坂正尙)

※2~「逆襲される文明」(塩野七生)

※3~「ローマ人の物語 14」(塩野七生)

2. 2 建国 (452~800)

(1) ラグーナの島へ

ヴェネツィアの建国史には 452 年ゴート族やフン族アッティラが侵入してラグーナ（潟）の中に逃げ込み、建国したとある。アッティラは在位 433~453 年、ハンガリーを中心に大帝国を建て、ローマにも侵入した。

476 年 オドアケルによりラヴェンナでローマ皇帝アウグストゥスが廃位され西ローマ帝国が滅亡するが、オドアケルの帝国も 492 年 東ゴート族テオドリックに追われて消滅する。

552 年 東ローマ帝国（ビザンチン帝国）ユスティニアヌス帝がタギナエの戦いで東ゴート族を駆逐するも 566 年 ロンゴバルド族がイタリアに侵入。イタリアはビザンチン帝国とロンゴバルト族の領土が、交互に入り組み荒廃した。（*1）

こうした混乱の中、ヴェネツィアは更にラグーナ（潟）の島（トルチェッロ島、キオッジャ、マラモッコ）に逃げ込み、ビザンチン帝国の属国として塩・魚の河川交易で生き始めた。

*1 ~ 「ローマ亡き後の地中海世界 上巻」(塩野七生)

(2) ラグーナの中央に都市建設

800 年 ゲルマン民族の一派フランク王国のシャルルマーニュが、ローマ法王より神聖ローマ帝国戴冠した。

811 年 息子ピピンはマラモッコを焼き討ちするものの、ヴェネツィアはラグーナに逃げ込んでフランク軍の大型船をラグーナの中に引込み、航路標識用杭を引き抜き、引き潮を利用して座礁させ小舟で襲撃し撃破した。

身をもって危機を脱したヴェネツィアはトルチェッロ島、キオッジャ、マラモッコから、更にラグーナ中央のリアルトへ逃げ込み、ヴェネツィア人工島が誕生。ドゥカーレ宮殿（元首宮殿）を建築した。

(3) 交易路の拡大と体制整備

ラグーナの中に逃げ込みながら、ヴェネツィア人は自立を図る。697 年には、元首制を採用し、選挙で選んだ元首（ドージェ）のもと行政組織を構築した。初期の元首はビザンチン帝国の被官だった。

ヴェネツィア元首の所在地はラグーナ（潟）の中を移動した。697 年 初代元首はエラクレアにいたが、743 年にはマラモッコに、811 年に防衛に有利なリアルト、現在のヴェネツィアに移動した。商業の中心地は、内陸に近いマラモッコにあったが、900 年代にヴェネツィアに移った。

811 年のピピン撃退によりビザンチン帝国と神聖ローマ帝国の双方に存在感を示したヴェネツィアは、812 年、両帝国間で締結したアーヘンの条約では、「ヴェネツィアはビザンチン帝国に属する。」「ヴェネツィアの交易を神聖ローマ帝国内で認める」と明記され独立を確保した。交易地もポー河川流域から東地中海沿岸へ広がった。

828 年には精神的拠り所となるサンマルコ寺院を建築した。エジプトのアレクサンドリアを交易で訪れていたヴェネツィア商人が、イスラム教徒に襲われたキリスト教（コプト教）教会から「聖マルコの遺骨」を購入してヴェネツィアへ持ち帰り、サンマルコ寺院をドゥカーレ宮殿の隣に建築して守護聖人として祀った。サンマルコ寺院はビザンチン様式で、コンスタンチノーブルの聖ソフィア教会に合わせて、5つのドームを十字に配しており、建築や絵画など内部は圧倒的にビザンチン様式だった。

2. 3 自立 (800~1282)

2. 3. 1 ビザンチン帝国下の自立

(1) アドリア海 海賊の海

ローマ帝国亡き後の地中海世界は海賊の世界になった。航海することによって生きる手段には、交易と海賊がある。海賊には「ピラータ」私設の海賊と「コルセロ」公設の海賊の2種類ある。

交易で生きようとしたヴェネツィアは「ピラータ」と闘うこととなった。アドリア海東岸ダルマツィア地方は入江多く、耕地少なく「ピラータ」の巢窟だった。アドリア海西岸のイタリア本土は入江がなく遠浅で寄港地がない。大洋と違い地中海では、度々風向が変わり突然無風となることもある。順風待ちのためアドリア海東岸の入江ごとに泊地を求めて航海する必要がある、ヴェネツィアにとって、ダルマツィア地方に住むスラブ人海賊の駆逐は喫緊の問題だった

(2) ビザンチン帝国の西方防衛

ヴェネツィアはビザンチン帝国に属しながら、地理的には神聖ローマ帝国に近いという難しい立場にある。この難しい立場を逆手にとって、ヴェネツィアの生き方を指し示した人が居た。

991年 ピエトロ・オルセオロ2世は、30歳の若さで元首になると、翌992年 ビザンチン帝国との間で「ヴェネツィアはビザンチン帝国に属しビザンチン帝国の西の防衛を行う。対価はコンスタンチノーブル入港料を半額にする」という条約を締結する。この結果、ビザンチン帝国の西、アドリア海に巣くうダルマツィア海賊を討伐するという大義名分を得ることができた。998年になるとヴェネツィアは満を持して徹底した海賊一掃作戦を実施した。ダルマツィア地方ポーラ、ザーラ、セヴェニコ、スパーラト、レジーナ、クルツォラ、ラギーザ（ドゥブロブニク）、カッタロ、スクータリ、ヴァローナ（アドリア海出口）の海賊を駆逐し、要塞を設けた。

ピエトロ・オルセオロ2世の政策の特徴は、

① 占領した地方のスラブ人海賊を水夫として雇用した。生活の糧を得られれば、海賊する必要もなくなる。

ヴェネツィアからダルマツィア各地に寄港して、コルフ島に至るまでにガレー船の漕ぎ手を揃えた。今もドゥカーレ宮殿すぐ南の岸辺はリヴァ・デ・スキアヴォーニ（スラブ人の岸辺）と呼ばれる。

② ヴェネツィア、アレクサンドリア、コンスタンチノーブルの三角貿易路を確立した。運んだ荷物は、

ヴェネツィア-->アレクサンドリア：奴隷（スラブ）と木材、

アレクサンドリア-->コンスタンチノーブル：金と銀

コンスタンチノーブル-->ヴェネツィア：香料と布地。ヴェネツィアで市を立て、欧州の商人へさばく

～～>商船はコッカ船（丸形帆船）L/B=3 2, 3本の帆柱、ラテン帆と呼ばれる三角帆

軍船はガレー船 L/B=40m/5m=8。ビレンマ 27列*片舷2名=108名漕ぎ手+40名商人&戦士

③ ヴェネツィア人はカトリック教徒ではあったが、形式的にしるビザンチン帝国下に入った。政治的には、

「神聖ローマ帝国皇帝といえども、自分の領土と考える訳にはいかない」

「ローマ・カトリック法王も法王のやり方に従えと迫る訳にはいかない」

この結果、中世を覆った「皇帝派（ギベリン）」と「法王派（グェルフ）」の争いに巻き込まれずに済んだ。

外部勢力と呼応した国内の絶え間ない抗争はフィレンツェやミラノを始めイタリア都市国家の特色だが、

ヴェネツィアではオルセオロ2世のとった政策の結果、後世の混乱の芽を摘むこととなった。

ヴェネツィアはビザンチン帝国の一部ではあったが、ビザンチン帝国のギリシャ正教ではなく、ローマ法王のカトリックに属した。とはいえ、サンマルコ寺院は元首個人の礼拝所であり、法王庁の司教区寺院は遙か西方のサンピエトロ・カステッロ寺院に設けた。こうして、ヴェネツィアは精神的拠り処を設けると共に、法王庁との間に距離を置いた。「まずヴェネツィア国民、次いでキリスト教者」だった。

(3) ノルマン人の侵入

800～900年代、ヴェネツィアの敵はスラブやサラセンの海賊だったが、1081年にはシチリア、南イタリアに侵入してきたノルマン人が相手になった。ビザンチン帝国は東方のイスラム勢力セルジュークトルコから圧迫を受け、西方へ割く余裕がなく、西方の守りの完遂をヴェネツィア共和国に要求した。代わりに、ヴェネツィアは「コンスタンチノーブルへの入港料を無料にする。」というビザンチン商人と同じ権益を要求して、認められた。

ノルマン人が南イタリアからギリシャへ渡るとは、ヴェネツィアにとってもアドリア海の出口を抑えられることになり、何としても避けねばならなかった。ヴェネツィアはノルマン人に対して艦隊を送り何度か交戦して、戦果を収めた。遂に1085年ノルマン人はバルカンから撤退する。陸上では太刀打ちできないヴェネツィアも、海上では勝てた。ノルマン人の東地中海への侵入を阻止したヴェネツィアは、コンスタンチノーブルを軸とした貿易によって、利益は拡大した。

2. 3. 2 十字軍

<大きな時代の流れ～「あぶみの時代」の到来>

9世紀に「あぶみの時代」が来たことが、歴史を動かした(*1)という。東地中海のギリシャ人、スラブ人、トルコ人、アラブ人に西方フランク人の侵入が始まったのは1050年以降のことである。フランク人が存在感を示したのは「あぶみ」のお陰であった。鎧を着て盾と槍を持ち、馬に乗って突撃する。衝突の瞬間、「あぶみ」で体を支える戦法が突破力を生んだ。従来の重装歩兵の密集軍団が戦場を制した時代から、人馬一体となった騎馬軍団が優勢となった。1090年代から始まる十字軍の攻勢は「あぶみ」なしでは、考えられない。

馬を持つことは、8～10世紀ころ封建制社会が到来して諸侯、騎士が荘園を持つことから始まった。荘園では三圃制農耕により生産力が高まった。三圃制農耕とは、全耕地を3分割して、秋耕地→春耕地→休耕地と3年で2毛作して1年休耕地して地力を回復する輪作を繰り返す農法である。耕地を犁機で工作するには、牛または馬が必要であり、荘園の単位で牛馬を共有することで、初めて成り立つ農法だった。

*1～「ヴェネツィア 東西のかなめ」ウイリアム・マクニール

(1) はじまり

1095年 「神がそれを望んでおられる」クレルモン公会議でウルバヌス2世が演説し十字軍を提唱した。

当時の中世封建社会は、三圃制農耕の導入により農業生産力が向上して各地に「人口増加・土地不足」問題を抱えており、封建領主(諸侯、騎士)は「領土拡張の野心」を持っていた。一方、東方のビザンチン帝国は、急拡大したセルジュークトルコによる、小アジア侵入、エルサレム占領を受けて、ローマ教皇へ救援を要請した。

ローマ教皇ウルバヌス2世は、この状況下にあって、ギリシャ正教をローマ・カトリックが統合するという「キリスト教世界統合」の夢を抱き、「聖地回復の宗教的情熱」に火が付いた。

(2) 遠征

- ・1096～1099 第1次十字軍 エルサレム占領し、エルサレム王国建国
- ・1147～1149 第2次十字軍 内部対立で不成功
- ・1189～1192 第3次十字軍 リチャード獅子王、フリードリヒ1世、フィリップ2世<->サラディンの抗争
- ・1202～1204 第4次十字軍 コンスタンチノーブル攻略 ヴェネツィア破門
- ・1228～1229 第5次十字軍 神聖ローマ帝国皇帝フリードリッヒ2世 2回も破門
- ・1248～1254 第6次十字軍 エジプト攻略 ルイ9世捕虜に
- ・1270 第7次十字軍 ルイ9世チェニスで病没
- ・1291 終了 マメルーク朝によるアッコン陥落

(3) 十字軍の結果

欧州とオリエントが膝を突き合わせて付き合った十字軍は、第1次のみ成功したものの、第2次から第7次迄は、目的を達することなしに失敗で終わる。

人々の宗教的情熱に支えられて、200年続いたこの時代は、教皇権が絶頂に達した時代だった。カノッサの屈辱で皇帝を屈服させた教皇は皇帝や王や時には都市までも破門し屈服させる力があつた。この時期にランスやシャルトルなど司教座都市に壮麗な大聖堂が建てられた。しかし、失敗に終わるころには教皇の権威は失墜し、アナーニ事件で教皇が憤死したり、アヴィニヨンの捕囚で教皇が捕らわれの身になるなどの状態になった。また、従軍した諸侯・騎士も没落し、異分子導入に抵抗して純粋培養を続けようとした組織は衰退した。

反対に各国の王権は伸長し、遠隔地貿易や貨幣経済の伸長によるイタリア都市国家も繁栄を来した。異分子導入に興奮してオリエントの富や知的財産を受け入れた王や商人は、大いに刺激を受けて大学を作りルネサンスを始めることになる。特に、地中海の海上輸送、後方支援、制海権維持を担当したヴェネツィアを含むイタリア海洋都市は、大きな成長を遂げた。

2. 3. 3 十字軍時代のヴェネツィア

(1) 国営造船所アルセナーレ・コレガンツァ

1104年 国営造船所アルセナーレが創立された。十字軍の開始に伴い、強力な艦隊向けに船舶の需要が増え、創立に至ったものである。造船所はビザンチン帝国に倣って国営であり、武器庫・火薬庫を備えていた。一旦、元首宮殿に危機到来の折は、元首の親衛隊の役割も果たした。共和国の国賓は必ず案内された。現在はイタリア海軍基地であり入場不可だが、正門の外に海洋博物館があり、入場可能で船の模型が多数ある。昔の穀物倉庫が転用されている。

当時、始まった造船法の改良も、アルセナーレの伸長に寄与した。従来の造船法は、板と板をホゾとホゾ穴で組み合わせて水密構造を作り、全体を強化して甲板と上部構造を支える為、肋骨と支柱を入れていた。船大工の職人技が必要で建造期間も長かったが、11世紀になると、竜骨と肋骨を組み合わせ、板を釘で打ち付けてピッチと繊維で水密を保つ方法になり、技量も不要になった。図面を準備する造船技師が必要になったが、建造期間が画期的に短くなりガレー船連続建造が可能になった。また、ヨーロッパに於ける極盛相植物だったかしの森から切り出した「かしの木」を使えるようになった点も有利であった。

少し先走りすれば、対オスマントルコ戦争のころ、最盛期を迎える。

1473年第三造船所の建て増しによって従来の2倍の建造能力になる。面積25万平米、常時2,000人の職工、緊急時は3,000人が働いた。経営・経理・総務は貴族が担当するが、技術は平民が担当した。船体は第二、第三造船所で建造され、第一造船所でロープ、大砲、いし弓、火薬を積んで、最後に帆と錨を艀装される。ガレー船漕ぎ手の座椅子、オールの支えなど各部の規格は統一されていた。年間40~60隻を進水する能力を持っていた。1571年 レパントの海戦前には、2か月で100隻を建造した。完成した船は、造船所内の屋根付きドックにプールされ、軍用ガレー船は15世紀には50隻、1537年プレヴェザ海戦以降は100隻を持つことになっていた。

1104年アルセナーレが開設されると同じ頃、コレガンツァが生れた。ヴェネツィア商人間の事業提携手法であり、2人以上のメンバーが会社を作り、各メンバーは資本金の一部を負担する。全員が連携して働き、利益や損失は出資額に応じて分配する。このコレガンツァは商人間の取引であり、税金が少なかった。

(2) 第四次十字軍

1198年 十字軍の呼びかけに動かされフランスの騎士シャンパーニュ伯とブロア伯の発起にフランドル伯も賛成して始まった。「十字軍の目標はカイロ」「海路を取る。大量の船が必要になるのでヴェネツィアに依頼する」ことが決まった。

1201年 フランスから6人の使者が、ヴェネツィアを訪れ、元首エンリコ・ダンドロに申し入れる。

「4,500人の騎士と20,000人の歩兵を運ぶ船」「4,500頭の馬と9,000人の従士・馬丁を運ぶ平底船」「これらが必要とする食料」「期間は1年」これらの対価として、8,500マルクを支払う。(マルクは神聖ローマ帝国の通貨)この時、ヴェネツィアは50隻のガレー船と6,000人を元首が率いて参加する。対価は十字軍が征服した土地の半分を頂くと表明し、契約成立した。ヴェネツィア出発は1年後の1202年6月24日聖ヨハネ祭日と決定した。

ヴェネツィアは翌年までの1年間をかけて造船所能力一杯を使って建造し、契約の全数を揃えた。ところが、フランス側はシャンパーニュ伯が死去しモンフェラート侯が総大将に任ぜられるものの、騎士の離脱が続出する。1202年6月にヴェネツィアのリド島に到着したのは約10,000人。費用の支払いも25,000マルクに留まった。持参した金銀器を加えても51,000マルクだった。ダンドロは借金返済の猶予条件としてハンガリー王の扇動に乗って反旗を翻していたダルマチア地方のザーラの攻略を提案。ザーラ攻略に向かうことになった。

1202年10月8日 ヴェネツィア出発。この時の艦隊はガレー船50、帆船50、平底船80、輸送船20、合計200隻だった。11月10日にザーラ攻略開始、15日目に陥落し、翌年まで駐留することになった。

12月にビザンチン帝国の皇子アレクシスが訪れる。父王が弟に位を奪われ牢に入れられたので、「叔父を破滅して正当な帝位継承者の自分が帝位に付けるように助けてほしい」「条件は200,000マルクの支払い。エジプト攻略に10,000人の兵士、ギリシャ正教をカトリック教会に統合」と提案あった。モンフェラート侯が賛成し、フランドル伯、ブロア伯も賛成し、大勢は決した。

1203年4月6日 ザーラ出発。6月23日にコンスタンチノーブル前に到着して作戦会議を開催した。

7月11日 ガラタを総攻撃し陥落させ、数日後コンスタンチノーブルをヴェネツィアは海からフランス騎士は陸から攻城を開始した。ヴェネツィアは帆柱の高さに取り付けた橋を渡って城壁上に飛び移り城内を占拠した。アレクシス皇子の叔父は逃亡し、皇子はアレクシス4世として皇帝位に就いた。しかしアレクシス4世は契約を守ることができない。金の支払いもさることながら、ギリシャ正教の改宗など、ギリシャ人は許すはずもない。遂に、先帝のむこ、モルゾフレがアレクシス4世を殺害に至る。

十字軍はこの事態になって首脳会議を開き、「モルゾフレを倒す」「新皇帝は十字軍とヴェネツィアの選挙人が選ぶ」「領土はコンスタンチノーブルと帝国全土の1/4が新皇帝へ。残りは十字軍とヴェネツィアで折半する」「戦利品も同様に分割する」を決定する。

1204年4月6日 コンスタンチノーブル攻城戦が開始される。城側は前回より城壁を高く作り直して防御を強化するも、4月12日 十字軍は城壁にわたる橋を2倍に強化して遂に落城した。3日間の略奪が許された。金銀器や宝石の戦利品は、美術品を除いて400,000マルクになったと言われる。

ラテン帝国が設立され、新皇帝はフランドル伯ボードワンに決まる。ヴェネツィアの元首は「ヴェネツィア共和国元首」「ダルマチア侯爵」以外に「東ローマ帝国の3/8主催者」の名称も得ることになった。

この結果、クレタ島やネグロポンテを獲得し、ボスポラス海峡が開通して黒海への航路が確保され、東方との貿易が開始された。1243年にはモンゴル帝国が成立し、安全な交易路の確立と相まって物流は増大。モンゴル帝国は商業を重視して、銀本位制で兌換紙幣を発行し為替による決済手法も採用した。駅伝制を設けて交易路を脅かす盗賊は完全に駆逐された。

この時期にマルコポーロは元朝を訪問している。1271年 ヴェネツィアを出発し地中海東岸からペルシャに入り北京へ。1291年 ペルシャを通過して黒海のトレビズンドに出て、コンスタンチノーブル経由、帰還した。

2. 4 成長 東地中海の制覇 (1282~1453)

2. 4. 1 強国に向けた改革

<大きな時代の流れ～「いし弓の時代」の到来>

1282年 シチリアの晩鐘事件が発生した。シチリアにフランス王シャルル・アンジューが攻め込み支配権を確立した、更にビザンチン攻略を企てようとしたときに発生した。これは、アンジューの圧政に対してシチリア島民とこれを支援するアンゴラ家が起こした反乱であり、教会の夕べの鐘を合図に蜂起したと伝えられる。

この反乱では「いし弓」が使われた。いし弓は、騎士の突撃を前にして、相当の距離から騎士の装甲を射抜くことができた。いし弓により騎士の時代の終わりが始まった。また、このいし弓は海戦では強力な武器になった。見張り台から敵のガレー船の漕ぎ手に矢じりを浴びせることが出来る。イタリア海洋都市国家にとって、有効な武器を手にするようになった。

(1) 政治の改革 貴族制・十人委員会

十字軍が壊滅した13世紀末、イタリア都市国家では民主政体が行き詰まった。共和制から中央集権国家への動きが強まり、はじめは僭主制に、やがて君主制に変わる国が相次いだ。

ヴェネツィアも、生き難い時代になった。「ジェノバとの戦いで東地中海での独占体制が崩壊」「ギリシャ人の西方嫌い」「十字軍撤退に怒ったローマ法王による回教徒との交易禁止」など外圧の元、統治能力に優れた政体を持つ必要が出ていた。

1297年 元首ピエトロ・グラデニーゴが38歳で元首に就任して7年間、周到に準備して改革を進めた。

「貴族制」～市民大集会の権限を無くし、共和国国会の議員数増加・任期終身化により国会の権限を強化して、野心を持った個人が、大衆をあおって大衆の専横に乗る形の元首就任を止めた。――>君主制の防止

「十人委員会」～反国家陰謀に対処するために作られた。次第に権限が増大し、非常時に少数の委員で政策決定できるようになった。――>強力な行政府

こうして、ヴェネツィアの政体が1個人・1家族に権限が集中することを防止した。

ヴェネツィア共和国は、国の統治を現代の私企業と同じように経営すると考えていたふしがある。「統治とは国家とその国民を治めること」であるが、「経営とは事業を経済的に行うこと」であり、「初めに商売ありき」のヴェネツィア人には経営が性に合っていたと思われる。

(2) 技術の改革 ムーダ・船・商業

<ムーダ>

ムーダと呼ばれる「定期商船路」の始まりは、1255年東地中海でのジェノバとの競争が表面化した頃である。ムーダの意味は「春が来て、虫が脱皮して飛び立つ」ことで、転じて、「航路の解禁」を意味する。商船団は春に出港して、秋に帰港した。初期にはガレー船が5～10隻で、14世紀になるとガレー船が大型化して2～3隻で船団を組み、1シーズンに30～50船団が組まれた。船団長はもちろん、航路は目的地も寄港地も政府が決める。航路は時期により異なるが「コンスタンチノープル、黒海」「キプロス、シリア、パレスチナ」「アレクサンドリア」「フランドル」がメインルートであった。ガレー船は漕ぎ手が兵士になり、軍船に転用できるので、海賊に対応でき、確実性と安全性が高く、定期航路を作った。

ガレー船は国有で、維持費は国が支払ったが、船の積荷は入札方式で決まった。入札に参加する大・中・小の商人こそが、各地の市況を把握しており、商人の意向で最適の商品を決定した。多くの漕ぎ手が乗船するので、人件費が高くなる不利を香料料などの高級品を積荷にして凌いだ。ヴェネツィアは、大企業の独占が国家経済の硬直化につながると考え、健全な中小企業の活動を支援した。大商人の独走が目立ったジェノバとの大きな違いだった。

<北方コグ船>

1300年前後、地中海でも北欧の丸形帆船「コグ船」が知られるようになり、造船技術が合成されはじめた。舵を船側に垂らす方式から船尾船体中心に移し、舵取り装置の導入により船の大型化を図った。また、船首楼の導入により、いし弓を用いた防衛力強化、居住区の確保が可能となった。当時導入され始めた羅針盤、航海図と相まって、冬期の航海も可能となった。

<商業技術>

1300年代、商業技術も進歩した。複式簿記はヴェネツィアの発明といわれる。複式簿記で商売の全貌が判るようになった。ここで使用されるアラビア数字はピサ経由で入手した。

銀行も始まった。4～5人の銀行家がリアルト橋のもと、聖ジャコモ教会前の屋根の下に机を並べて、帳簿を開いて待つ。商人の間で取引が纏まると、商人は誰々の口座にこれだけの金額を移してくれと依頼する。銀行家は帳簿に記載するだけで、口座間で金をやりとりした。これを書く銀行（バンコ・ディ・スクリッタ）と称した。

ヴェネツィアの銀行に口座を持たない商人との取引も、相手銀行との間で為替取引を行い、柔軟性のある商取引を可能とした。

面白いことにヴェネツィアの銀行は融資をしなかった。フィレンツェのメディチ家は、ハプスブルクの戦争に高金利で融資して富を蓄積し大をなしたが、ヴェネツィアでは、商人間の取引に特化して地道に稼いだ。

経済的に成り立つ商業を円滑に運営することを、国としても支持したヴェネツィアの特色が出た点と思われる

2. 4. 2 イタリア海洋都市国家の淘汰

(1) 四つの海洋都市国家

ローマ帝国亡きあとの地中海はサラセンの海賊がばっこしたが、9世紀には交易を目指したイタリア商船が、対サラセン海賊戦闘に関わることとなった。アフリカ・サラセンに近い南から、アマルフィ、ピサ、ジェノバ、ヴェネツィアの順で戦列参加した。イタリア国旗は赤+白+緑の3色旗であるが、イタリア海軍旗は国旗中央にヴェネツィア、ジェノバ、ピサ、アマルフィの国旗を並べたものである。

アマルフィは、10世紀中頃から11世紀中頃、ローマ教会と地中海の回教徒との仲介者であり、貿易の利潤を貿易に注ぐという資本蓄積のプロセスを廻していた。この国の商人は羅針盤をアラブから入手して西欧に伝えた。また、イスラエルに聖ヨハネ騎士団を作った、この騎士団は、時代と共に根拠地を変え、後にはロードス騎士団、マルタ騎士団と通称された。アマルフィは1073年ノルマン人に侵入される。その後、フランス・アンジュー家、スペイン・アンゴラと順に支配され、海外君主による徴税要求が重荷になって貿易は急減し十字軍に乗遅れた。

ピサは、9世紀から10世紀、サラセン海賊と争っていたが、十字軍遠征によって、海運国として活躍した。この国の商人はアラビア数字を西欧に伝えた。政治上は皇帝派（ギベリン）の都市であり、法王派（グェルフ）である陸側のフィレンツェ、海側のジェノバから反発を受けた。1250年 神聖ローマ帝国フリードリッヒ2世の死去以降、皇帝派の勢いが弱まる頃、1284年ジェノバとのメロリア海戦で敗北し姿を消した。

残る2都市はジェノバとヴェネツィアであり、4回にわたる争いを繰り返すことになった。

(2) ジェノバとの戦い

都市の中にドーリア、スピノラ、フィエスキ、グリマルディの4家族が抗争を続け、肝心な時に内紛した。

①第1次ジェノバ戦：1257年 アッコンでジェノバとヴェネツィアの商人間にトラブル発生。ジェノバ居留地をヴェネツィアが占領する。1261年 ニケーア帝国パラオロゴスと組んだジェノバは、コンスタンチノーブルからラテン帝国を放逐し、パラオロゴスがビザンチン帝国皇帝に就任して、ビザンチン帝国が復帰した。

1268年 内紛が激しくなったジェノバを見てビザンチン帝国はヴェネツィアに交易権を与えた。

②第2次ジェノバ戦：1291年 マメルーク朝が十字軍のアッコンを陥落して、東地中海の市場が黒海に移る。黒海沿岸市場の争奪戦が始まった。ジェノバとヴェネツィアはお互いに海賊行為を行い、1298年クルツォラ沖海戦に至る。ヴェネツィアは大敗。マルコポーロがジェノバの捕虜になり東方見聞録を牢屋で記述。

③第3次ジェノバ戦：1350年 オスマントルコがビザンチン帝国のコンスタンチノーブルを圧迫。ビザンチン帝国はヴェネツィアに海軍派遣を要請する。交換に黒海貿易の独占を要求したため、ジェノバと戦争になるも、ジェノバは内紛で自滅

④第4次ジェノバ戦：1378年 ヴェネツィアがコンスタンチノーブル近郊のテネドス島を要塞化しジェノバが反発。ジェノバと組んだハンガリア王がダルマツィア地方に、パトゥバがヴェネツィア対岸のイタリア本土に攻め込む。ヴェネツィアは受けて立つ。ペットーニ・ピサーニとカルロゼンが活躍。

1379年 「キオッジャの戦い」が始まる。ヴェネツィアの3方向から攻め込んだ連合軍は戦闘開始。隙を見てジェノバは、キオッジャを占領。ヴェネツィアはラグーナの杭を抜いて徹底抗戦。

1380年 ピサーニはキオッジャ北側の港出口に石を積んだ船を沈めて海上封鎖。大型ガレー船を出航不可とした。カルロゼンは南側を封鎖。小舟も出航不可になり食料が欠乏し、ジェノバ人4170人+ガレー船14隻を捕獲した。アドリア海に待機のジェノバ軍ガレー船39隻もピサーニ、カルロゼンに敗退。

1381年 「トリノの講和」成立。ジェノバは内紛で混乱し、ハンガリア王はダルマツィア住民に離反されてパトゥバもミラノとヴェネツィア連合軍に敗退して、ジェノバ連合軍は講和を要求した。

(3) 属州テッラ・フェルマ (本土)

ジェノバとの戦いを制したヴェネツィアはイタリア本土への足掛かりを得る。

ヴェネツィアで自給できるのは、魚と塩だけである。小麦粉やその他の必需品は、ギリシャや南イタリアから運び込んでいた。ヴェネツィア近くの本土に供給減を持つことは悲願だった。また、ヴェネツィアは仲介貿易で成り立っている。西欧からの街道や河川の安全性を保つことは必須の条件でもあった。

ヴェネツィアの目の前の北イタリアでは王国建設の野望に燃えたミラノ、ヴェローナ、パトウバの各都市間で争いが絶えなかった。この中で 1402 年ミラノのヴィスコンティ侯爵が急死した。ミラノはこの直後に始まったお家騒動で混乱。北イタリアの各都市は自発的にヴェネツィアの属州になることを望み、ヴェネツィアは受けた。ヴェネツィアは市長と警察署長の派遣以外は各都市の自治を認めた為である。こうしてヴェローナ、パトウバは、ヴェネツィア支配下へ入った。こうしてヴェネツィアの人口は 15 万人から 150 万人へ拡大した。

(4) 戦いをするな

1381 年 ジェノバを駆逐したヴェネツィアは最盛期を迎える。

1423 年の元首トマソ・モチュニーゴの演説が残っている。

「国債は 1,000 万ドゥカートあったのが、600 万ドゥカートに減り、」

「輸出の総計は 1,000 万ドゥカートで、輸入もほぼ同額。あがる利益は、400 万ドゥカートにのぼる。」

「国営造幣所は毎年 120 万ドゥカートの金貨を造幣し、銀貨は 80 万ドゥカートを造幣した」

「ヴェネツィア中の家屋の価値は 700 万ドゥカートを超え、その家賃収入は年に 50 万ドゥカートに達する」

「45 隻の大型ガレー船に 11,000 人の船員が常時出ていける状態にある」

「300 隻を超える 120 トン (200 アンフェラ) 級以上の大型帆船には 8,000 人の船員が乗船し」

「3,000 隻に及ぶ 24~120 トン (40~200 アンフェラ) 級の小型帆船には 17,000 人の船員が職に就いている」

「造船工は 6,000 人を超え、絹・綿布の織物工は、帆布を織るものを含めて 16,000 人に達する」

「年収が 700~4,000 ドゥカートある市民は 1,000 人を超える」(家賃を除いて年に 15~20 ドゥカートあれば、楽に暮らせたという)

だから戦いをするな。

このままいけばヴェネツィアはキリスト教世界第一の経済大国であり続けることも可能であろう。

もしも常時戦いにある状態になれば、今日 1 万ドゥカート持つ者は、明日 1 千ドゥカートの主でしかなくなり、2 つの家を持つ者は、1 つの家しか持たないことになるのだ。

しかし、時代は許さなかった

2. 5 圧迫 (1453~1600)

2. 5. 1 大国の登場

<大きな時代の流れ～「大砲の時代」の到来>

15世紀後半から16世紀初め、欧州では広大な領地を有し、その資源を動員する能力を持った中央集権国家が現れた。封建諸侯の分権的性格を打破し、中央集権を可能としたのは大砲だった。城壁を破壊する大砲の力が、城にこもる封建諸侯の力を抑え込んだ。広大な領地と多数の人民を支配するようになった大国は大きな力を動員できるようになった。

オスマントルコと神聖ローマ帝国は大国へ成長し、ヴェネツィアは存亡の危機を迎えることになる。

(1) オスマントルコ

1281年 オスマン(1281~1326)が、小アジアの内陸部にオスマントルコを建国する。ビザンチン帝国の弱体化に乗じて領土を拡張し、1365年には首都を欧州のアドリアノーブルに移し、ブルガリア、マケドニアにも侵入した。ところが、1402年アンカラでチムール軍に敗北。しばらくは鳴りを潜めたものの、1430年には再び攻勢を示した。

1451年、マホメット2世が19歳でスルタンに就任。アドリアノーブルにあって淡々とコンスタンチノーブル攻撃の準備を進める。ボスポラス海峡の欧州側に後方支援の控え城メルリ・ヒサールを作り、トルコ全土から15万人を集めた。

1453年4月16日からコンスタンチノーブル攻城を始めて5月13日に落城した。この間、トルコは城壁前に集めた大砲から砲撃、トンネルを掘り城壁下に仕掛けた火薬を爆破、更にボスポラス海峡から金角湾まで船団の山越えを敢行。コンスタンチノーブルは落城し、ビザンチン帝国は滅亡した。マホメット2世はこの後も、東のペルシャ、北のハンガリー、南のヴェネツィアに戦いを仕掛ける。1470年第一次トルコ戦争でヴェネツィアはネグロポンテを失うも、ようやく1479年に講和する。マホメット2世は1481年死亡する前、ヴェネツィアに画家の派遣を要請。ベッリーニが派遣され肖像画を残した。

この後も、大国オスマントルコは膨張を止めず、ヴェネツィアとも第七次までトルコ戦争を起こす。しかし、戦争の間の平和な時期になると、必要な物資の輸出入には、ヴェネツィアとの交易に頼った。

(2) 神聖ローマ帝国 (ハプスブルク家)

神聖ローマ帝国は800年フランク帝国シャルルマーニュのローマ法王による戴冠に始まる。フランク王国からザクセン家、ザリエリ家、ホーエンシュタウヘン家に皇帝権が伝わった後、ドイツは大空位時代を迎える。この時代に1273年 初めてハプスブルク家からルドルフ(1273~1291)が、選帝侯の選挙で神聖ローマ帝国皇帝になる。1282年にはハプスブルク家のオーストリア支配が始まるが、帝国は弱体だった。

1508年マクシミリアン1世(1508~1519)が神聖ローマ帝国皇帝となり各国と婚姻を結び勢力を拡張した。孫のカール5世(1519~1556)はスペイン、フランドル、オーストリア、ナポリを領有した。周囲を囲まれたフランス王フランソワ1世は対決姿勢を取り、4回の戦争に至る。この間、ローマ法王がフランスを支持した為、1527年 神聖ローマ帝国はローマへ侵入。サッコデローマ(ローマ略奪)が起き、ヴェネツィアにガラス製品、毛織物、レース織物 手工業職人が逃げ込んだ。

カール5世とその子フィリップ2世(1556~1598)は、カトリックの勢力拡大のため、欧州・北アフリカで対トルコ・対プロテスタント戦に走る。

2. 5. 2 東地中海交易路の競争力維持

(1) 大航海の時代～新たな交易路の出現

1492年 コロンブスの新大陸発見、1498年 ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見が起きる。

当時、ヴェネツィア共和国はフランドル航路をもち、商人はリスボンにも常駐していたので、各々の航海が、何時出発して、何を運び、何時帰ったか、リスボンへの帰着とほぼ同時に知っていた。その上で、コロンブスの航海は持ち帰った物産が、ヴェネツィアとはお門違いであることから無視した。ヴァスコ・ダ・ガマの航海では、インドの香辛料が持ち帰られ、騒ぎになったが、検討の結果、インド航路に乗り出すことはなかった。実用的でないと判断したからだった。

ポルトガルのヴァスコ・ダ・ガマが持ち帰った胡椒の量は、ヴェネツィアがエジプトのマムルーク朝を経由し、東地中海航路で入荷していた年商の胡椒の 1/50 と少量であること。行きに1年、帰りに8か月も要したこと。13隻行って帰ったのが、6隻だったことも問題視した。何より、インド航路の積荷は片道のみだが、東地中海航路は、胡椒だけを運ぶ航路ではなく、行き・帰りの積荷は多数ある。この経済性を考えると、インド航路への取り組みは困難だった。

(2) 危機の連続／カンブレール戦

しかし、15世紀末から16世紀初め、ヴェネツィアにとって、凶年が続いた。

1499年 第二次トルコ戦争が発生。トルコがペロポネソス半島南端ヴェネツィアの港モードネとコロネに攻め込んだ。1500年 ポルトガル軍が、エジプト・インド航路に従事するアラブの香辛料運搬船を撃沈する。大砲を持たないエジプトのマムルーク朝は混迷しヴェネツィアに入荷する胡椒の量は激減する。1506年にはヴェネツィアは「通商五人委員会」を設立し、経済再編成を検討し始めるほどだった。

しかも、この時期、外交上のミスでカンブレール戦が始まる。1508年ミラノ、ナポリを占拠した神聖ローマ帝国ドイツ、スペインは、フランス王と共にローマ法王を抱き込み、ヴェネツィアの本土属州を狙って戦争に入った。仲の悪い神聖ローマ帝国とフランスの接近を見過ごし、ローマ法王まで取り込まれたことは、外交上の大きなミスだった。3者の同盟軍は、ヴェネツィアのラグーンの対岸まで攻め込み、大きな危機を招いた。

(3) 回復

この時の元首レオナルド・ロレダンは、必死の外交を繰り広げる。まずは、ローマ法王を同盟から引き離し、更にドイツとフランスの間を分離した。1510年になると、逆にヴェネツィアはドイツ、ローマ法王と合同してフランスの追い出しに成功した。カンブレール戦の結果、本土の農園の防衛を果たしたことは、ヴェネツィアの多様化に大きく寄与することになる。

カンブレール戦に勝利した頃、オスマントルコはセリム1世(在位1512～1520)のもと1516年シリアを征服、1517年マムルーク朝エジプトを倒してエジプト支配を確立。紅海の制海権も獲得した。この結果ポルトガルの軍力による紅海封鎖・胡椒流入防止はなくなり、紅海を経由したヴェネツィアへの胡椒の流入が再開した。

元々、ポルトガルは国王に権限が集中する王国で商売のセンスに欠ける。アントワープでの胡椒の値付けを、暴利をむさぼる高値に設定していた。公務員たる下僚は事業の効率も考えず、公務員たる船乗りはペルシャへの横流しまで行っていた。ヴェネツィアを経由した胡椒の流入が再開すると、ひとたまりもなく、ポルトガルは競争力を無くした。こうして、ヴェネツィアの香料取引は復活した。香料の取引から撤退するのは1600年オランダのモルッカ諸島の植民地化によってである。大航海時代に抗しきれなかったのではなく、植民地時代に応じることが出来なかったためである。

「通商五人委員会」はヴェネツィアの産業構造を変える。取引だけではなく、毛織物、絹織物、ガラス、レースなどの手工業と加工貿易に力を注ぎ、外界の変化に合わせて自らも変化するというヴェネツィアらしさを発揮した。

2. 5. 3 トルコとの戦い

(1) プレヴェザの海戦 ～ 第三次トルコ戦争 1538年

オスマントルコは、大国であり「自分達は戦争も平和も思いのままになる国。」と思っていた。トルコでは、セリム1世の跡を継いだ、スレイマン1世（在位1520～1566）は北方への拡張を図り、1527年にハンガリーを領有して、1529年には第1次ウィーン包囲戦に至る。神聖ローマ帝国との戦いには敗北するが、今度は南方へ転じる。ヴェネツィアがギリシャに持つ小さな土地でも、目の前にあれば目障りであるとして、キプロス島、コルフ島、エーゲ海の島々への進出を図る。

こうしたなか、1国では対抗できないヴェネツィアはローマ法王、スペインと組んで立ち向かうこととなり、連合艦隊の結成が決まった。ローマ法王もスペインも常備艦隊を持たない。この為、ヴェネツィアはローマ法王軍向けにガレー軍船を提供する。スペインは事あるごとに海賊を傭兵にして、ことが終われば海賊に戻っていた。公設の海賊「コルセロ」である。連合艦隊出撃に向けた協議は難航した。

行き先は、スペインのカルロス5世が北アフリカのアルジェリアのサラセン海賊の根城を潰すべきと言いはり、ヴェネツィアは東地中海へ向かうべきと言う。ローマ法王の異教徒イスラムの進出を止めるため、トルコ海軍をたたくという妥協案に従った。

総司令官の人選は、スペインはアンドリア・ドーリアを主張するも、ヴェネツィアは傭兵隊長であることから反対する。法王は陸戦の司令官経験者を提案するが、海戦と陸戦は違うとこれにも反対。時間切れでアンドリア・ドーリアに決まった。

集合予定の6月半ば、コルフ島にヴェネツィア海軍はガレー軍船82隻で到着し、法王軍も27隻で集合する。しかし、スペインは遅れに遅れて7月も過ぎるころ、82隻の予定が49隻で参加した。

9月27日ようやくコルフ島を出て南下した。先頭は法王軍27隻（グリマーニ指揮）、次陣はスペイン49隻（ドーリア指揮）、後陣はヴェネツィア65隻（カペッコ指揮）。トルコ軍はプレヴェザ湾を出て連合艦隊を追う。先頭はドラグー、主力はバルバロッサ。

サンタマウラ島近くで両者は接近する。ところが、ドーリアは「近くに避難する港がない海上であり、戦闘は危険ゆえ逃げる」と言う。グリマーニとカペッコは「自分達だけでも戦う」と反対。この時、トルコ軍が後方のヴェネツィア帆船を襲撃し、これを見たガレー船2隻も命令なしで突撃し、トルコ軍の集中攻撃を受けて沈んだ。

これを見ながら、ドーリアは撤退命令を下し、北へ向けて逃げた。

奇妙な敗戦ではあった。戦力を保持しながら逃げたドーリアは各国の非難を受ける。最早、ヴェネツィアはスペインを信じなかった。ヴェネツィアはマルヴェジアとナウプリオンを放棄する条件で講和に漕ぎつける。

この戦いの結果、「トルコ海軍は無敵」の聲が、地中海全域に行きわたった。サラセン海賊は襲撃を繰り返し、船団の護衛は2～3倍の強化が必要となった。

(2) レパントの海戦 ～ 第四次トルコ戦争 1571年

トルコは1566年 46年間続いたスレイマン1世の時代が終わり、アルコール中毒のセリム2世に代わる。

セリム2世は100年来のヴェネツィアの領土であったキプロスに食指を動かす。キプロスはぶどう酒の産地だった。1570年6月トルコ軍10万人によるキプロス大攻勢が始まり、9月にはキプロスの首都ニコシアを陥落させ、キプロス最大の港町ファマゴスタに向かった。

翌1571年5月ファマゴスタの攻城戦が続く中でヴェネツィア、ローマ法王、スペインの間で連合艦隊結成の交渉が持たれた。総司令官はスペイン カール5世の庶子でフィリップ2世の腹違いの弟であるオーストリア公ドン・ホアンに決まった。スペイン艦隊はジャン・アンドリア・ドーリア、法王艦隊はコロナ、ヴェネツィア艦隊はバルバリーゴが率いる。

6月にヴェネツィア海軍110隻は集結地メッシーナへ到着。法王軍23隻も7月に入港し、スペイン軍75隻も8月に集結した。合計208隻は9月28日メッシーナを出航。イタリア南岸を経てアドリア海を横断、コルフ島経由、ギリシャ西岸に達した。ここで、8月16日にはファマゴスタが陥落し、無残な死を迎えたことを知る。

トルコ艦隊212隻がレパントに停泊中との知らせを受けた連合艦隊は南下して、レパントに通じるパトラス湾入口に達した。ここで作戦会議あり、ドーリアやスペインの参謀は、トルコ艦隊の隻数が多いことを理由にして引き返すことを提案するが、コロナとヴェネツィアは海戦を主張し3:3の結果となる。最後は総司令官ドン・ホアンが海戦を決定した。

1571年10月7日 パトラス湾入口に布陣した連合艦隊に対し、レパントから出てパトラス湾出口に向かったトルコ艦隊が激突した。連合艦隊左翼のヴェネツィア バルバリーゴ軍は、トルコ艦隊右翼のシロッコ軍を海岸まで追いつめて全滅させた。中央ではドン・ホアン本隊はトルコ艦隊中央のアリ・パシャの陣形を崩して旗艦を占拠し、アリ・パシャは戦死する。しかし右翼のドーリア軍はトルコ軍左翼のウルグアリを抑え込むべきところ、安易にウルグアリの逃走を許した。スペインの傭兵隊長のドーリアは、例により、完勝できたはずの連合艦隊の足を引っ張った。

しかし、連合艦隊の勝利は画期的だった。もしキリスト教連合艦隊が敗北しておれば、地中海世界はトルコの手落ちていたことは確実だった。この後、無敵と思っていたトルコに対する劣等感が消えた点も大であった。

勝利した翌年の1572年も連合艦隊の結成を図り、6月14日に出港と決まるが、3国間の思惑の違いが出て10月2日に解散した。スペイン フィリップ2世はアルジェリアに執心し、法王、ヴェネツィアはトルコ海軍ウルグアリをたたくことを主張。ここに、アルジェリアへの進出を図るフランスが、トルコと密約を結ぶ動きもあり、解散に至った。

ヴェネツィアは1国だけの対トルコ戦には耐えることはできない。もはやこれまでと判断して、秘密のうちにトルコとの単独講和を協議し1573年に締結する。ヴェネツィアは欧州中から非難を浴びた。

(3) 絵画

この様にヴェネツィアは対トルコ戦を凌いだが、それにしてもコルフ島、クレタ島、キプロス島など海外の領地・拠点が城壁で守られていることは、印象的である。言葉だけで平和は守れない、敵地での外交の成功のためにも、軍事力が必要であると、理解していたヴェネツィア人であるからこそ、このような造営物を作ったと感心させられる。

こうしてヴェネツィアは平和を守り、安定した政治を得たが、その遺産は島中にある芸術品であり、欧州中の美術館にある絵画である。

ルネサンスの中心は、14～15世紀にローマ、フィレンツェだったが、15～16世紀ヴェネツィアに移る。

ヴェネツィアには買い手が居たことが大きい。ローマは法王、フィレンツェはメディチ家、ピッティ家など個人が買い手だったが、ヴェネツィアでは団体が買い入れた。政府が買い入れた元首公邸、商人の集会所が発注したスクオーラ（同信会館）には天井、壁面一面に絵画が描かれている。

ヴェネツィア絵画・文化の振興の秘訣は、政治の安定だった。フィレンツェにしても、ジェノバにしても、ミラノにしても政治の混乱が芸術活動を潰したが、ヴェネツィアの政治の安定は続く。

更に、政教分離を貫いたことも大きな要因だった。ヴェネツィアは完全なキリスト教社会ではなかった。形式上東方正教会、ビザンチン帝国の属国であった時代はあるが、ビザンチン風ではなく、ましてイスラム風ではない。色々な宗教の境界線にあって刺激を受け、ヴェネツィア風という絵画が生れたものと思われる。

ヴェネツィア絵画は以下のような人々が支えた。

ベッリーニ（1434～1516）

カルパッチョ（1455～1525）

ジョルジョーネ（1478～1510）

ティツィアーノ（1489～1576）

ティントレット（1518～1594）

ヴェロネーゼ（1528～1588）

カナレット（1697～1768）

*～ヴェネツィア物語（塩野七生、宮下規久雄）

2. 6 衰亡期 (1600~1797)

(1) 海運・手工業の低下

15世紀までのヴェネツィアは海運国であり、交易が生きる道だった。

16世紀にはトルコの台頭、大航海時代の始まりなどにより、ヴェネツィアの国力は一旦、大きく後退したが、香料貿易の復活や、手工業の流入、本土への拡張などにより、復活した。この中で、投資先が海運だけでなく、手工業・農業に広がった。

17世紀になるとイギリス、オランダの海運業がヴェネツィアを凌駕することになる。積荷にかかる保険料が、イギリス、オランダは5%であるのに対して、ヴェネツィアは8~10%に上がった。同じころ、造船業の不振も始まる。地中海沿岸部の人口増加に伴い、深い森林の枯渇が地中海全体に及んだ。豊かな森林は北欧のみに残り、ヴェネツィアは船材の輸入から始めて、船そのものの輸入に頼らざるを得なくなった。

- ・1533年 ムーダによる定期船団方式で保険料無しの安全な航海も廃止になる。
- ・1600年 イギリス、オランダ東インド会社の植民地経営開始。モルッカ諸島の香辛料貿易が独占される。
- ・1602年 ヴェネツィアは航海条例を發布。ヴェネツィア製品運送からイギリス、オランダ船締め出しを図る。イギリス、オランダ商船が「ヴェネツィアを商業活動の基地にしたい。」と申し出るが、「商品はヴェネツィア市場で売買し、ヴェネツィア国籍の船で運ばねばならぬ。」と断る。イギリス、オランダの商船は、ラグーザ、アンコーナ、トリエステに流れ、ヴェネツィアの関税収入は40%減になった。活動が衰えたときの保護主義は失敗する一例である。
- ・1618~48年 三十年戦争が起きる。神聖ローマ帝国の人口が1/3になる。という荒廃の為、ヴェネツィアの手工業も打撃を受ける。この時期に毛織物工業の生産量は1/3以下に激減した。
- ・1575、1630 ペストが発生する。ヴェネツィアの人口は15万人→10万人に減る。

(2) 農業・産業形態の変化

交易や手工業の低下の中、農業だけは企業化が進む。灌漑事業が推進され、土地にふさわしい農産物の選択と改良により、小麦、米以外にトウモロコシが栽培された。長い間、輸入に頼っていた食料を自給して、輸出するようになった。本土人口は1600年代半ばに150万人だったが、1700年代半ばには200万人に増えた。

産業形態が変わってしまった。産業が交易であれば、資本もコレガンツァで集めることができ、敗者復活戦がありえたが、産業が農業・手工業になれば、資本が必要となる。資本がない者は参入できない。敗者復活戦など望むべくもない。こうして貧富の差の固定が始まった。資産の相続を考えると子供の数も減る。国力も低下する。風通しも悪くなる。

(3) クレタ島攻防戦 ~ 第五次トルコ戦争 1647~1669年

こうした中、国の総力を挙げて戦う形態では、殆ど最後になる戦争が始まる。1647年 トルコがクレタ島に攻め込み、第五次トルコ戦争が始まった。ギリシャ本土、ペロポネソス半島に足掛かりを失ったヴェネツィアが、1204年以来、領土としていたクレタ島は海上交易上、最も重要な島だったが、トルコにしてみればエーゲ海の出口に横たわるヴェネツィアの領土は、トルコが制海権を持つうえでの目の上のタンコブではあった。

1647年クレタ島に上陸した5万人のトルコ軍は、島内のヴェネツィア人を駆逐し2~3の孤立した海中城塞以外はクレタ島の主都カンディアに閉じ込めた。こうして1647~1669年の25年間に亘ってカンディアを巡る攻防戦が戦われた。海軍総司令官フランチェスコ・モロシーニは25歳から50歳迄、攻防戦を戦い抜いたが、1668年の一年間に、カンディア防衛戦に消費した戦費が439万デユカートであり、ヴェネツィアの年間歳入が390万デユカートと国家の財政を超える事態に至って撤退を決定、1669年 講和成立し撤退。ヴェネツィアの海外の足掛かりはアドリア海のコルフ島だけになってしまった。

(4) ペロポネソス半島基地争奪戦 ～ 第六次／第七次トルコ戦争 1683～1699年／1714年

1683年 オスマントルコがウィーンに攻め込み、第二次ウィーン包囲戦が始まる。キリスト教世界は、神聖同盟を結成して反撃に転じる。ヴェネツィアはこれに参画し、第六次トルコ戦争が始まった。ヴェネツィアはカンディア防衛戦の収束以来、閑職にあったモロシーニを再度の海軍総司令官に任命した。

モロシーニはペロポネソス半島にあった旧ヴェネツィア基地の失地回復に努めた。オスマントルコは、西からオーストリア・ポーランドに、北からロシアに、南からヴェネツィアに攻められ、旧ヴェネツィア基地を次々と放棄する。1688年 モロシーニは元首に選ばれる。元首でかつ、海軍総司令官になるのは、エンリコ・ダンドロ以来のことだった。モロシーニは1694年 戦場で死ぬ。75歳だった。ヴェネツィアは元首宮殿の投票の間に凱旋門を設けて功を表した。戦争は1696年に終わるが、モロシーニの成功は、全欧州を敵に回したトルコの不運によるものであった。

1714年 オスマントルコがロシアと講和してエーゲ海に攻め込み第七次トルコ戦争が始まるや、ギリシャにあった全ての基地は次々とトルコ軍の手に落ちる。ギリシャ西岸にあるコルフ島の死守は、ヴェネツィア最後の戦いになった。こうして、アドリア海のみがヴェネツィアの海として残ることとなった。

(5) 1700年という境界線

この戦いの教訓は、「もはや単独ではトルコと戦えない。」ということであった。侵略を捨て、中立を堅持し、外国を刺激することを避ける。大きな変動を引き起こさず、現状維持に努める。こうして絶対中立と孤立主義がヴェネツィアの国是となった。

1700年を境として際立った差が生じる。1700年以前は、冒険・活動・危険・緊張・変動の時代だったが、1700年以降は、静止・安全・中立・快楽追及の時代になる。自由で開放的な体制から規制と保護の体制へ変化し新しい事業に乗り出す冒険的精神や活力の衰頹、旧守的性格の増大が現れ、「柔軟性の喪失」と「精神の硬直化」が見られるようになった。

ヴェネツィアの文化は高かった。庶民の生活は想像以上に豊かで生活の楽しみがあった。お祭り、音楽、観劇、人びとは生活を楽しんだ。ヴェネツィアは旅行者にとって魅力ある観光都市となった。望めば国会、元首宮殿、アルセナーレ、スクオーラなど何でも見ることができた。観劇、オペラ、音楽は、島内に多数の劇場を設けて、国内外から集まる観客に娯楽を提供した。喜劇作家のゴールドーニ、音楽のヴィヴァルディやアルビノーニ、絵画のティエポロやカナレットはこの時代の芸術家だった。娯楽の為にはとばく場や謝肉祭も設けられた。とばく場では仮面をつけてトランプに興じ、謝肉祭は欧州の国々の通常2か月を延長して6か月に及んだ。（＊1）

ヴェネツィア人の生き方は変わった。イギリス外交官の本国への報告によれば、「ヴェネツィアの生きる道は交易であったが、今や商業から人々は去り、家や土地を買い、見世物や劇場に通って快適な生活を楽しんでいる。」
「彼らは、自分の子息を東方に送り、航海と貿易に慣れさせたが、今ではヨーロッパの海外旅行に送り、紳士になる勉強をさせている。」

こうして「海から陸へ、労働から遊びへ、勤勉から消費へ、企業家から土地の貢租で生きる年金生活者へ」の変化が生じ、「変化を恐れず、変化に付いて行く能力の衰えを示す」ようになった。（＊2）

＊1～「ヴェネツィアの歴史 共和国の残影」 永井三明

＊2～「文明が衰亡するとき」（高坂正尅）

(6) 滅亡

1700年代、ヴェネツィアが絶対中立と孤立主義に閉じこもる中、欧州はフランス、オーストリア、プロシヤ、ロシアなど絶対王朝の時代を迎え、お互いに争った。

1789年 フランスでフランス革命が発生し王党派が敗れて王政廃止され、1793年 ルイ十六世が処刑される。王の処刑に対して、イギリス、オランダ、オーストリア、プロイセン、スペインは同盟し対フランス戦に立つ。この戦いの中でもヴェネツィアは中立を守る。

1796年3月21日ナポレオンは26歳でイタリア方面フランス軍総司令官に着任。4万のフランス軍を率いてオーストリア軍と4月10日ジェノバで戦い、占領。4月27日トリノを占領、5月10日ミラノで戦い、占領。ナポレオン軍はオーストリア軍を追って、ミラノの隣国、ヴェネツィアに侵入する。6月初めには本土の首都であるヴェローナを占領する。海軍は維持していたヴェネツィアだが、陸軍は皆無だった。しかし、ここに至って、総動員令を6月6日に発布する。如何にも付け焼刃の命令であり、攻撃する対象は何で、守備する対象は何か、曖昧にしたままの決定だった。

この時期、イギリス、オーストリア、スペイン、プロイセンからは対フランス同盟への参加の誘い、フランスからも2国間同盟の誘いを受けたが、十人委員会・元老院は拒絶し絶対中立を続行する。

7月31日から8月5日まで、3度にわたって戦われたオーストリア、フランス戦でナポレオンは勝利する。戦線はヴェネツィアの領内全域に広がり、11月にオーストリア軍が行った最後の戦闘も、ナポレオンは撃退して全土を制した。

ナポレオンはヴェネツィアにオーストリアのウィーン攻略の金を出せと迫るが、ヴェネツィアはノラリクラリと逃げる。本土ではレジスタンスが発生する。ヴェネツィアのラグーナに無断侵入したフランス軍艦を撃沈する。これらの動きに対して、1797年5月1日 ナポレオンはヴェネツィアに宣戦布告する。これを受けて5月12日開催された共和国国会では、「無抵抗で降伏する」議題に、537人の参加者の内、512人が賛成、20人が反対、5人が不明となり降伏を決定した。この時、184隻の海軍艦艇が健在だから、ラグーンに立てこもって徹底抗戦すべしと主張する貴族は1割以下だったと言う。1805年のトラファルガ海戦に出撃した軍艦数は、イギリス、フランスとも30隻程度だったことを考えると対抗可能だったかもしれない。

5月16日ナポレオン軍はヴェネツィア島内に進駐し「自由、平等、博愛」の札を建て、共和国は滅亡した。

1797年10月 カンポ・フェルミオ条約が締結され、フランス・オーストラリア間で分割

1866年11月 統一されたイタリアに編入

2. 7 ヴェネツィア人の姿勢

ヴェネツィアは「はじめに商売ありき」で生きた。言葉も通じない新しい土地に入っても、単語帳を片手に、好奇心旺盛に商売に取組み、定着した。資本がなくともコレガンツァで敗者復活した。

天秤の平衡を保つことが生きる道だった。「ビザンチン帝国と神聖ローマ帝国」「オスマントルコとキリスト教世界」。これらの中にあって、ヴェネツィア人としての視点を確固と持って対処した。外交も軍事も周囲の変化に適切に対処した。対処しなければ、生きていけなかった。

宗教から遠く離れる。「まずヴェネツィア国民、次いでキリスト教徒。」と言われるとおりに、「神のものは神へ、カエサルのはカエサルへ」を実践した。

しかし、産業の主力が交易から農業に移るにつれ、「新しい変化に対応する姿勢」が衰えた。硬直な教条主義「絶対中立と孤立主義」に陥ることになり、遂には共和国の滅亡に至る。

3. ヴェネツィアからの連想

3. 1 日本とヴェネツィアの違い

日本は、豊かな自然の中、旺盛な好奇心を持ち、交易に基づく資本主義を生み、高度な識字率、契約に対する真摯な姿勢を育んだ。また、外来の文明の持つドグマから自由で、自然の中に霊が宿るといふ山川草木悉皆成仏の神の国だった。

ヴェネツィアもまた、好奇心に満ちて海外へ出かけ、交易に基づく資本主義を育て、「はじめに商売ありき」で暮らした。宗教からも「まずヴェネツィア国民、次いでキリスト教徒」と言われるとおり自由だった。破門されても平気だった。また交易を守る為にバランスの取れた緻密な外交を行い、軍事に訴えることもいとわなかった。

しかし共和国は消滅した。産業が交易から農業へ／船から土地へ移り、「精神の硬直化」を招いた為である。「新しい変化に対応する姿勢を持ち、時代が変化したり、危機が起きたりする時に、臨機の措置を講ずることが出来なければ、国を失う」ことになることは理の当然である

3. 2 諸問題

日本も、「精神の硬直化」を恐れるべきである。「新しい変化に対応する姿勢の欠乏」が一番の問題である。トインビーの「歴史の研究」にある「いかなる巨大な国家もいつかは衰弱し滅亡もするが、一番致命的な要因は国家が自己決定できなくなることだ」の通りである。

四周の変化は急激である。「少子高齢化」「米中保護主義」「IOT/AI 導入」「中華圏構想」「北朝鮮問題」など多くの問題が目前にあり、国の在りようが問われている。

(1) 少子高齢化

日本の人口は 2004 年に 12,778 万人でピークを超えて、人口減が始まった。2053 年に 1 億人を割り 2105 年に 4,459 万人になるという。（*1）

「人口減で国力が低下する」「年金制度が破綻する」「移民の受け入れが必要である」など「国力衰退論」が、吹聴されている。しかし、歴史的には 14 世紀の人口減の後、ルネサンス時代が始まるなど人口が減ると新しい文化が始まっている。人口減になると社会インフラ投資が不要になり一人当たりの豊かさは増えるため、新しい文化を生む力が生じる。日本では縄文時代以降、4 回の人口増加の頭打ちがあり、各時代に日本らしい文化が、生まれた。（*2）

①縄文時代：狩猟・漁労・採集経済 20 万人。温暖化と共に弥生時代が到来し農耕開始。

②弥生・平安・鎌倉時代：水田開発・水稻農耕化 700 万人。国風文化・鎌倉文化

③室町・江戸時代：商品経済や金融・市場経済 3,000 万人。能や茶道や書院造りなど日本文化成立、元禄文化

④近代：工業化・化石燃料の転換 12,000 万人。

今や、人口増加の頭打ちを迎えている。新しい文化の到来を期待したい。

なお、国力低下対策は、経済学では人口増より、生産性向上の寄与度が大であり、別の対策が必要だろう。

「経済成長率＝生産性向上＋0.35＊資本増加率＋0.65＊労働投入増加率」（飯田秦之）

*1～「人口で見る日本史」（鬼頭宏）

*2～「人口減少で日本は繁栄する」（日下公人）

(2) 保護主義

米国の大統領が保護主義・反グローバル化に走っている。マスコミは「狂気の沙汰」「1929年大恐慌の再来」「貿易戦争で世界大不況到来」など大合唱の態である。

たしかに、昨今のグローバルな相互依存の時代に、保護主義は徹底することはできない。何処かに無理が来て、国民経済と政府財政に負担をかけ、長続きしない。政府がある産業を保護することは、保護された以外の産業を傷付け、国民経済に負担をかける。いずれ、この政策は放棄されるか縮小される。

一国の政府が、経済を管理し思うままに動かすことなど不可能である。その典型的な例が共産主義であって、権力を独占する共産党が政治の力で経済を計画通りに作るとして失敗した。実行可能な範囲は当該国が戦略的に重要とみなす「部分的な保護主義」だろうが、短期的であるし全体的な効果は小さいだろう。日本も過剰な危機感を抱いて独自ブロックを造ろうとしないことだ。

歴史的に見ればトランプ氏の言う「貿易黒字は正で、貿易赤字は悪である」という政策は、重商主義である。重商主義は、発展途上国向けの政策ゆえ、米国が採用するのは奇妙な感があるが、米国は移民が多く年率1%の高い出生率を持つ人口構造であり、ある意味、米国は発展途上国に近いのかもしれない。

80年代は、日本も重商主義国家であると攻撃された。リカードの「比較優位論」によれば、各国は得意な分野の生産に特化して、交易により各国が栄えるべし。となるが、70~80年代の日本がリカード論に従っておれば、繊維産業など軽工業の国に止まってしまっていて、現在の日本は無かつただろう。当時、日本はシュンペータの言うイノベーションが始まり、製造業優位への産業構造の切换え中であり、自然な成り行きとして、円高になって工場を海外へ移転するようになるまで、重商主義を全うした。

このように、各国の各時代に特有の事情はあるのだから、静観することが良いと思われる。

しかし、元々トランプ氏は選挙公約で保護主義を唱えていた。選挙で選ばれた大統領が選挙公約を守ることは、全く自然である。また、「貿易黒字は正で、貿易赤字は悪である」という施策は、昔から米国通商交渉官の施策であり続けており、国家としては全く狂気ではなからう。

トランプ氏の面白い点は、選挙公約で「政治をウォール街の金融資本家勢力から国民(ピープル)に取り戻す」と言っている点である。トランプ氏にとってこの公約が、最も基本にある公約と思われる。ちなみにウォール街金融資本家は東西冷戦で儲け、グローバル化で儲け、中国投資で儲けた。トランプ氏はロシアと協調的であり、反グローバルであり、中国を攻めている。

トランプ氏はオバマ政権での対中融和政策を切り替えて、「改革開放と言いながら知的所有権を横取りする」「ある製品に特化して集中的に安売り攻勢をかける」「金融自由化と言い乍ら為替管理を止めない」中国に対し関税攻勢をかけている。まことに妥当な政策であり、日・欧も連携して是正させるべきである。

(3) IOT/AI 導入

AIの可能性は高い。マスコミは、「人間は機械に駆逐される・追い使われる」「人間の仕事がなくなる」など悲観的な論調で不安をあおっている。マスコミは「精神の硬直化」を来たすことなく、冷静に勉強して日本の強点・弱点を整理するべきである。

AIには、1960年代の検索・推論、1980年代の知識表現、2010年代の機械学習という3つのブームがあった。日本でも多くの試行が行われ、各分野で各々の技術を積み上げて現在に至っている。ノウハウの蓄積も大きい。今や、ディープラーニングによる「特徴表現学習」を色々な産業で使える時代に入りつつある。使う対象範囲の選択や経済性評価や目的の絞り込みは人間しかできない。これらは、経済の要求そのものであり、活発な経済の動きあつての決定である。更なる経済の活発な動きを期待するとともに、従来からの知識蓄積に基づいて議論を起こし生産性の向上に繋げるべきである。また、これらの動きを阻害する諸般の規制は撤廃したい。

(4) 中華圏構想

5月の中国全国人民代表大会で憲法が改正され、国家主席の任期が撤廃された。いよいよ「終身皇帝」実現に近づいている。この中で、「尖閣諸島への侵犯」「南シナ海のハーグ判決無視」「台湾友好国の買収」など、個々の膨張政策構想の実現を図っているが、6月には李克強首相が「一帯一路売込み」に来日し「AIIBへの協力要請」した。

トランプ氏の中国潰しの動きに併せて、自国経済の借金漬けに行き詰った中国は、日本の金を目当てに、すり寄って来たと見るべきである。「一帯一路」は、「債務のわな」をかけることで見返りを要求する仕組みであり、スリランカのハンバントタ港 99 年貸借、ギリシャのピレウス港買収、オーストラリアのダーウィン港 99 年リース、ジブチに投資して海外基地建設など、各地に問題が発生している。世界最大の対外金貸し国である日本にはすり寄る国も多いが、誤った投資はすべきではない。

(5) 北朝鮮問題

朝鮮は大昔から「自国の抗争に他国を引き込んで戦わせる」ことを世の習いにしてきた国である。

- ・0663 白村江～百済が新羅に侵略され、日本は義理堅いので百済を助けに行ったら、唐の大軍が待っていた。唐も新羅に頼まれて出て来ていた。結局、唐と日本が戦った。
- ・1274&81 元寇：南宋との間で貿易していた日本に対して、南宋を攻めていたフビライは日本征服を企てる。高麗はモンゴル帝国へ接近、自ら進んで元寇を主導した。
- ・1894 日清戦争～清の傀儡のような李氏朝鮮は日本の安全上も問題であり、自主独立を促した。朝鮮朝廷は分裂して夫々日本と清を呼び込み、気付いた時は日本と清の間で戦争が起きていた。日本が勝利して下関条約を結んだとき、日本が要求した第一項は「朝鮮の独立を認める」だった。他国の独立のために自国の将兵の血を流す戦争など他にはないはず。
- ・1904 日露戦争～日清戦争の結果、独立した朝鮮は対馬の対岸の馬山浦にロシア海軍基地を提供した。気付いた時は、日本は世界最強の陸軍を持ち、日本の4倍の規模の海軍を持つロシアと戦っていた。
- ・1950 朝鮮戦争：ソ連傀儡の金日成は38度線を超えて釜山まで進攻し李承晩を追い込んだ。米軍が出て仁川上陸、鴨緑江へ押し返したが、今度は中国軍が出た。この間、李承晩は戦争を他国に任せ、対馬海峡に李承晩ラインをひき、竹島を占領し、日本漁船を拿捕、抑留した

拉致問題解決の為には、先ずもって北朝鮮と「国交正常化」しなければならぬ、という人々が居るが、危険な発言である。核放棄と拉致被害者帰還まで制裁を続け、以後は関わらないことが良い。

3. 3 必要なレジームチェンジ

以上述べたように、諸問題が山積みする中で、「精神の硬直化」を来たした人々がいる。マスコミの論調は、悲観的で誤解を生じる主張も見受けられる。野党は肝心な問題点説明には見向きもせず、政策論争そっこのけで政局しか考えていない。特にこの1年半、根も葉もない言いがかりで、内閣支持率を下げる努力ばかりしている。現状を変えよう、前進しようとしないう政治は不要である。

2012年12月に政権が交代した後、経済数値が好転している。しかしこの好転は結果であって、本来の原因は、戦後レジームの変換を図るといふ政治姿勢そのものにある。日本は早く、自分の足で立つ国になる必要がある。

長く繁栄を続けたヴェネツィアでさえ、わずか26歳のイタリア方面軍司令官の前でなすすべもなく立ち往生した。「精神の硬直化」を脱しようとする事なく、自己決定できない人々はヴェネツィアの消滅を見直す必要がある。

(1) デフレ脱出

幸いなことに日本では2012年12月、アベノミクスの登場以来、名目GDPが493兆円→551兆円、有効求人倍率が0.83→1.59。失業率が4.3%→3.1%。日経平均株価が8,664円→22,500円。円/ドルが84円→110円に好転した(*1)。これは下野した時期に勉強した現政権が、金融政策を財務省・日銀へ丸投げしていた、従来のレジームを変換し、世界的に標準的な経済政策を採用したことが原因である。

マンデル・フレミングの法則「変動相場制の国では金融緩和が効果的であり、固定相場制の国では財政政策が有効である」やクルーグマンの「経済低迷の原因を国外に求めるな。原因は国内施策の誤りだ。」(*2)の通り、不必要な時期に「金利切上げ」「金融引き締め」「消費増税による経済腰折れ」を生んだ、日銀、財務省のデフレ方針を変えることで、近年まれな好転の時代を迎えている。

さらに、この方針を貫いて消費税率あげなど蹴散らしたい。たとえば、シムズ理論に従って、金融だけでなく財政投資も増額し、国防費も2%に上げる対策を取るなどの議論を直ぐにでも始める必要があると思われる

*1～総務省統計局28年度、その他

*2～「良い経済学、悪い経済学」(クルーグマン)

(2) 自分の足で立つ

国際信義や他国の防衛力に頼って、自分の足で立とうとしない姿勢を改める必要がある。憲法の前文や九条を改定して、自分の国の在り様は、自分たちで決める普通の国になる必要がある。

ヴェネツィアはひたすら理想主義に走り、「絶対中立」「孤立主義」を守るだけで過ごしていた。この結果、26歳のナポレオン登場後、わずか1年で消滅した。日本もひたすら理想主義に走り「精神の硬直化」を来たしておれば、消滅する。

これだけ世界が混乱してポリティカル・コレクトネス、ポピュリズム、自国第一主義など意見が百出する中で国際信義など頼る対象では無かろう。日本には十分な歴史と伝統がある。1万5千年にわたる「豊かな自然」に囲まれた歴史をもち、「旺盛な好奇心」に溢れた進取の気質をつちかい、海外文明を取り入れながら「ドグマからの自由」を守り通して、「資本主義」を生み出したのだから、自分の足で立つべしと考える。

参考にするべき先賢のご意見は多い。～～理性的に現状把握し、広い歴史感覚をもって日本の選択を考えるには「強固なプラグマティズム」が必要である。これを貫く為には、「不動の立脚点」が必要になる。これが日本の歴史と伝統である。(*1)

*1～「なぜ国家は衰亡するのか」(中西輝政)

以上

ヴェネツィアまとめ

ヴェネツィアはまことに小さな国である。長さ3 Km、幅は広いところで2 Km、狭いところは1 Kmもない。人口も少なく11世紀の人口は10万人、多い時でも20万人を超えなかった。

小さいのは、もともと人が住まないところに人間が造った人工島だから当然といえば当然である。5世紀半ば、フン族やゴート族から逃れてラグーナ（潟）の島々に移住したのが始まりで、9世紀初めにフランク族の侵入を受けて、現在のリアルト（堤防、高い岸）に更に逃げ込み、人工島を造って住んだ。

ところが、この小さなヴェネツィアは、11世紀ピエトロ・オルセオロ2世の時代に「交易に生きる。このため外交と軍事を持つ。」という国家方針を確立し、12世紀になるとアドリア海で重要な勢力となった。13世紀末にピエトロ・グラデニーゴの改革で「貴族制と十人委員会」を導入し、以降200年に亘って地中海に於ける最大の強国になった。ヴェネツィアの海運業と商人は、地中海貿易の中心になり、その海軍は最強となった。歴史上、最小の面積と最少の人口を持った大国と言える。

しかもこの国は近代文明の特徴的な仕組みの多くを生み出した。コレガンツァ（パートナーシップ＝有限会社）、複式簿記、銀行、為替手形、常設外交使節、キャンパスの油絵、印刷業、劇場、オペラ座。。。

しかし、パワーベースを持たないヴェネツィアの興隆は、大きな領土を持つ帝国の出現で陰りが出る。15世紀中頃～後半オスマントルコとフランスやハプスブルクの進出、ヴァスコ・ダ・ガマによるインド航路発見以降の大航海時代の幕開け、西ヨーロッパの産業の成長などは、ヴェネツィアが成功した国際環境を消滅させ東と西を海上輸送でつなぐ仲介業が成り立ち難くなった。15世紀後半、ヴェネツィア経済は困難を迎える。

これらの逆境の中でも、ヴェネツィアは外界の変化に合わせて自らも変化するというヴェネツィアらしさを発揮する。海運業の効率化、工業化と加工貿易の推進、テッラ・フェルマ（本土）への拡張により食料増産に注力し、16世紀後半もなお繁栄していた。この時期、軍事の上ではガレー船の戦いとして最大規模のプレヴェザの海戦やレパントの海戦を戦い抜き、文化の面でもルネサンスの中心を担った。今もヴェネツィアや世界各地の美術館に残るヴェネツィア絵画の数々はこの時期のたまものである。

だがしかし、17世紀に入ると外界の変化は更に厳しくなる。軍事国家そのものであるオスマントルコは数万人単位の陸軍を動員して、数千人で守るヴェネツィアの海外領土を個別に奪った。またオランダはモルッカ諸島を占領して東インド会社を設立し香辛料の産地そのものを抑えた。更に、ヴェネツィアの防衛の困難性激化による「プロテクションレント」が高価になり、税金の高騰を招いた。また数回のペストによる人口減、地中海地方の人口増による木材の枯渇（船価の高騰）、高級品の制作に固執するギルドの存在、三十年戦争によるドイツ市場の消失などもこの時期に発生した。

これらの外圧の元、新しい事業に乗り出す冒険的精神や活力の衰頹、旧守的性格の増大、自由で開放的な体制から規制と保護の体制への変化（柔軟性の喪失と硬直化）が現れた。

その昔、交易が生命線であった時代、例え親が大損失を出したとしても、その子はいし弓兵として船に乗り、わずかな商品を元手に商売を覚え、次第に支店を拡げ、最後は親の借金を返すという「サバイバル」の仕組みを備えていた。しかしヴェネツィア人の生き方は変わった。「ヴェネツィアの生きる道は交易であったが、今や商業から人々は去り、家や土地を買い、見世物や劇場に通って、快適な生活を楽しんでいる。」「彼らは自分の子息を東方に送り、航海と貿易に慣れさせたが、今ではヨーロッパの海外旅行に送り、紳士になる勉強をさせている。」

こうして「海から陸へ、労働から遊びへ、勤勉から消費へ、企業家から土地の貢租で生きる年金生活者へ」の変化が生じ、「変化を恐れず、変化に付いて行く能力の衰えを示す」ようになった。

「通商国家は常に、新しい変化に対応する姿勢を持ち、時代が変化して危機が起きる時に臨機の措置を講ずることが出来なければならない」という原則が破れたとき、1797年ナポレオンの占領を迎える。

年表

<建国>

- 0452 フン族アッティラ（位 433～453、ハンガリー居城）侵入。ラグーナ（潟）の中に逃げ込む
 0800 フランク王国シャルルマーニュがローマ法王より戴冠。息子ピピンはマラモッコを焼討ち、撃退

<自立>

- 0991 ピエトロ・オルセオロ 2 世元首に。「ビザンチン帝国の西を防衛。対価は入港料半額」の条約を締結
 0998 アドリア海東岸、ダルマツィア地方で徹底した海賊一掃作戦を実施。海賊を駆逐し要塞建設
 1081 南伊にノルマン人侵入、駆逐。「ビザンチン帝国の防衛強化。入港料無料」の権益を得。<～～鐙の時代
 1104 国営造船所アルセナーレ開設 / 同じ頃：コレガンツァ開始
 1204 第 4 回十字軍 元首エンリコ・ダンドロ コンスタンチノーブル落城、ラテン帝国の開始 黒海航路開通
 1255 ムーダ（ガレー商船による船団）創設

<成長>

- （1282 シチリアの晩鐘事件 いし弓によりフランク・アンジュー軍団を撃退）<～～いし弓の時代
 （1291 ジブラルタル海峡の開通 / 1315 フランドル航路の開始）
 1297 元首ピエトロ・グラデニーゴの改革 貴族制導入、十人委員会の開始
 1379 ジェノバとの間に「キオッジャの戦い」開始。ヴェネツィアのピサーニ、カルロゼン活躍。
 1381 「トリノの講和」成立。
 1402 本土（テッラ・フェルマ）に属州の獲得
 1423 元首トマソ・モチュニーゴの文書（1000 万デユカートの輸出・入で 400 万デユカートの利益、戦うな）

<圧迫>

- （1400 年代後半 トルコ、フランス 国王へ権力集中、中央集権制開始）<～～大砲の時代
 1453 オスマントルコ マホメット 2 世、コンスタンチノーブル落城 ビザンチン帝国崩壊。
 1470～79 第一次トルコ戦争 マホメット 2 世モンテネグロ占領
 1482 マホメット 2 世死去 この前年にベッリーニ肖像画作成（ロンドンのナショナルギャラリー所蔵）
 1492 コロンブスの新大陸発見 / 1498 ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見
 1508 カンブレール戦 元首レオナルド・ロレダンの外交戦 肖像画（ロンドンのナショナルギャラリー所蔵）
 1527 ハプスブルク カール 5 世、ローマ略奪（サッコディローマ）イタリア本土荒廃。ヴェネツィアにガラス
 製品、毛織物、レース織物 手工業の職人が逃込む。交易から手工業、農園へ産業形態の変化。
 （1529 オスマントルコ ハンガリーを味方にしてウィーン包囲、ハプスブルクとの本格戦闘）
 1535 ムーダの廃止、最後のムーダがアレクサンドリアへ航行
 1550 年代 本土（テッラ・フェルマ）でトウモロコシ、米の生産開始、食料自給
 1538 第三次トルコ戦争 プレヴェザの海戦 キリスト教国敗北 オスマントルコ勝利
 1571 第四次トルコ戦争 キプロス島喪失 / レパントの海戦 キリスト教国勝利 オスマントルコ敗北
 <衰亡>

- 1575、1630 ペスト猖獗
 1600 オランダ東インド会社の植民地経営。モルッカ諸島の香辛料貿易独占。
 1602 航海条例：ヴェネツィア製品運送からイギリス、オランダ船の締め出し。
 1645～1669 第五次トルコ戦争 モロシーニ、クレタ島攻防戦、クレタ島喪失
 1648 30 年戦争による市場の荒廃<～～ドイツ交易の低下
 1797 ナポレオン侵入。ヴェネツィア共和国滅亡

参考文献

1. 基本資料

海の都の物語：ヴェネツィア共和国の一千年 塩野七生 新潮社
 ヴェネツィア東西ヨーロッパのかなめ 1081-1797 W・H・マクニール 講談社
 文明が衰亡するとき 高坂正尨著 新潮社
 ヴェネツィアの歴史：共和国の残照 永井三明著 刀水書房

2. 参考資料

都市ヴェネツィア：歴史紀行 フェルナン・ブローデル 岩波書店
 ヴェネツィア帝国への旅 ジャン・モリス 講談社学術文庫
 ヴェネツィア史 クリスチャン・ベック 白水社
 ヒト：異端のサルスの1億年 島泰三 中公新書
 縄文の思想 瀬川拓郎著 講談社現代新書
 日本人の起源 洋泉社
 縄文時代 瀧音能之監修 宝島社
 街道をゆく#7巻(砂鉄の道) 司馬遼太郎 朝日新聞社
 なぜ日本だけが中国の呪縛から逃れられたのか：「脱中華」の日本思想史 石平著 PHP新書
 菜の花の沖 司馬遼太郎 文芸春秋
 司馬遼太郎全講演 1、3、5 司馬遼太郎 朝日文庫
 逆襲される文明 塩野七生 文春新書
 ヴェニス商人の資本論 岩井克人 ちくま学芸文庫
 ローマ人の物語 14 塩野七生 新潮社
 ローマ亡き後の地中海世界 上巻 塩野七生 新潮社
 ヴェネツィア物語 塩野七生, 宮下規久朗 新潮社とんぼの本
 図説人口で見る日本史：縄文時代から近未来社会まで 鬼頭宏著 PHP研究所
 人口減少で日本は繁栄する 日下公人 祥伝社
 良い経済学悪い経済学 ポール・クルーグマン著 日経ビジネス人文庫
 なぜ国家は衰亡するのか 中西輝政 PHP新書

以上